

アフリカ系アメリカ人と「英語」をめぐる一考察

— Toni Morrisonの言語観を中心に —

秋 田 淳 子

[1]

1998年に第7作目の小説*Paradise*を発表した1931年オハイオ州ロレイン生まれのToni Morrisonが、*The Bluest Eye* (1970), *Sula*, (1973. オホアナ文学賞受賞), *Song of Solomon* (1977. 全米批評協会賞、アメリカ学士院賞受賞), *Tar Baby* (1981), *Beloved* (1987. 1988年ピューリッツァー賞など受賞), *Jazz* (1992) の6作の小説を発表した後、1993年10月7日にアフリカ系アメリカ人文学者として初めてノーベル文学賞を受賞したのは、いまだ記憶に新しいところである。1994年に*The Nobel Lecture in Literature, 1993*として出版された1993年12月7日のノーベル文学賞受賞演説は、彼女の小説に通底する「language (言葉)」の力にたいする絶対的な賛美と敬意の表明である。

預言力をもつアフリカ系アメリカ人の盲目の老婦人が、町はずれの家に一人で住んでいた。ある日、彼女は、彼女の洞察力がまやかしであると疑う数人の子供たちの訪問を受ける。子供は老婦人に問う。「私の手には一羽の小鳥がいます。生きてるか死んでいるかあてて下さい。」盲目の老婦人には、子供たちの質問の動機が分かるだけであった。そして子供たちに、「死んでいるか、生きているかは分かりません。分かるのは、それがあなたの手の中にあるということです」と答えるのであった。

“Once upon a time there was an old woman. Blind but wise”¹⁾という昔話の冒頭をもつモリソンのノーベル文学賞受賞演説は、このような老婦人と小鳥のたとえ話に始まり、その比喩をモリソンが解き明かしていく構造をとっている。手の中の小鳥が死んでいるなら、それを手にしている人はその事実と、それを殺してしまったことに気づくであろう。小鳥を生かすか殺すかは、それを手にした人の責任による。モリソンは、老婦人の言葉をこのように解釈する。この解釈をモリソンはさらに発展させ、小鳥は言葉 (language) であり、老婦人は作家 (a practiced writer)²⁾を意味していると語る。言葉は生命をもつものであり、作家がそれをつかさどっているという。

このたとえ話には、神格化された生命をもつ言葉の力と、崇高な作家の使命にたいする、モリソンの敬意が表わされている。³⁾「生きた言葉 (a living language)」は賛美されるが、反対に、使用する者の責任によって死んでしまった言葉は、厳しく弾劾される。モリソンの「死ん

1) Toni Morrison, *The Nobel Lecture in Literature, 1993* (London: Chatto & Windus, 1994), 9.

2) *Ibid.*, 12.

3) 言葉を使用する責任をはたそうとする作家モリソン自身の決意は、この演説においてつぎのような言葉でも表明される。言葉を用いて執筆することは「崇高」なことであり、人生が動物のそれと異なるのは、言葉を使用することによるという: “Word-work is sublime...because it is generative; it makes meaning that secures our difference, our human difference—the way in which we are like no other life./ We die. That may be the meaning of life. But we do language. That may be the measure of our lives” (*Ibid.*, 22).

だ言葉 (a dead language)⁴⁾にたいする告発は、作家と言葉という限定された関係を越え、言葉を使用する全ての者の責任を問うこととなる：“[The old woman] is convinced that when language dies, out of carelessness, disuse, indifference, and absence of esteem, or killed by fiat, not only she herself but all users and makers are accountable for its demise.”⁵⁾

モリソンは「死んだ言葉」のさまざまな形態を示し、その非を告発する。使用が適切でないために生命を奪われている「言葉」とは、どのようなものなのであろうか。モリソンは、あらゆる「死んだ言葉」に共通する性質を、つぎのように述べる。

... a dead language is not only one no longer spoken or written, it is unyielding language content to admire its own paralysis. Like statist language, censored and censoring. Ruthless in its policing duties, it has no desire or purpose other than to maintain the free range of its own narcotic narcissism, its own exclusivity and dominance. However, moribund, it is not without effect, for it actively thwarts the intellect, stalls conscience, suppresses human potential. Unreceptive to interrogation, it cannot form or tolerate new ideas, shape other thoughts, tell another story, fill baffling silences.⁶⁾

「死んだ言葉」の特徴をもつものとして、モリソンは「公用語 (official language)」をあげる。

Official language smothered to sanction ignorance and preserve privilege is a suit of armor, polished to shocking glitter, a husk from which the knight departed long ago. Yet there it is; dumb, predatory, sentimental. Exciting reverence in schoolchildren, providing shelter for despots, summoning false memories of stability, harmony among the public.⁷⁾

「公用語」は、騎士が脱ぎ捨て、過去の遺物となった武具のイメージでとらえられている。騎士の自由な動きや活動を阻む仰々しい武具は、その地位の特権に甘んじて自由な精神や意志にもとづく言語活動を展開させない「死んだ言葉」として批判される。「公用語」は、「生徒たちに尊敬の念をおこさせ、暴君を擁護し、大衆に安定や調和といった誤った記憶を呼び起こす。」特権をふりかざす暴君は、権力をもって圧制を強要する。暴君のような「公用語」はその特権をふりかざし、安定や調和といった幻想のもとに大衆を縛ってしまう。こうした「公用語」の特性は、自由かつ流動的に活動し、安定や調和といった静的なものに束縛されない「生きた言葉」のそれとは対極にあるものである。

「公用語」を含む「死んだ言葉」の中でもモリソンが特に厳しく弾劾するのは、「弾圧する言葉 (oppressive language)」である：“Oppressive language does more than represent

4) Ibid., 13.

5) Ibid., 14-15.

6) Ibid., 13-14.

7) Ibid., 14.

violence; it is violence; does more than represent the limits of knowledge; it limits knowledge.”⁸⁾ 「弾圧する言葉」が行なう暴力以上のこととは、「知識を限定」することだという。モリソンは、日常生活におけるさまざまな「弾圧する言葉」を示す。

Whether it is obscuring state language or the faux language of mindless media; whether it is the proud but calcified language of the academy or the commodity-driven language of science; whether it is the malign language of law-without-ethics, or language designed for the estrangement of minorities, hiding its racist plunder in its literary cheek—it must be rejected, altered and exposed.... Sexist language, racist language, theistic language—all are typical of the policing languages of mastery, and cannot, do not, permit new knowledge or encourage the mutual exchange of ideas.⁹⁾

知識を限定し硬直化させる言葉、マイノリティを疎外し差別を生じさせる言葉、メディアという媒体をとおして支配や暴力をふるう言葉。「弾圧する言葉」は、新しい知識や思想のやりとりを規制する。「生きた言葉」が往き来する風通しのよい空間を確保するためには、「死んだ言葉」は「拒絶され、改められ、暴かれなければならない。」生命をもつ言葉を、支配の道具や暴力の手段とすることで死なせてはならないのである。

小鳥と言葉について対話を始めた老婦人と子供たちのたとえ話は、入れ子構造をとり、別のたとえ話が挿入される。聖書の創世記におけるバベルの塔のたとえ話である。創世記第11章の「バベルの塔」は、世界中の人が単一の世界語を用いていた時代の話である。シニアルの地の人たちが、「有名になろう。そして、全地に散らされることのないようにしよう」（第4節）と、天まで届く塔のある町を建てる。その地に主が降り、つぎのようにいう。「彼らは一つの民で、皆一つの言葉を話しているから、このようなことをし始めたのだ。これでは、彼らが何を企てても、妨げることはできない。我々は降って行って、直ちに彼らの言葉を混乱させ、互いの言葉が聞き分けられぬようにしてしまおう」（第6～7節）。創世記によると、異なった言葉を用いるようになった人たちは全地に散らされ、町の建設も頓挫してしまう。この町がバベルと呼ばれるようになったのは、「主がそこで全地の言葉を混乱（バラル）させ、また、主がそこから彼らを全地に散らされたからである」（第9節）。¹⁰⁾ 言葉の分断を「不幸」ととらえる「通念」に反して、モリソンはこのたとえ話をつぎのように解釈する。

The conventional wisdom of the Tower of Babel story is that the collapse was a misfortune. That it was the distraction, or the weight of many languages that precipitated the tower's failed architecture. That one monolithic language would have expedited the building and heaven would have been reached.... Perhaps the achievement of Paradise was premature, a little hasty if no one could take the time to understand other languages, other views, other narratives. Had they, the heaven they imagined might have been found at their feet. Complicated, demanding,

8) Ibid., 16.

9) Ibid., 16-17.

10) 『旧約聖書』からの引用は、日本聖書協会出版の1995年版を使用した。

yes, but a view of heaven as life; not heaven as post-life.¹¹⁾

単一ではなく複数の言葉が存在することは、モリソンにとっては混乱ではなく樂園を意味している。¹²⁾ バベルの塔の崩壊は、多様な言葉と視点が解放された瞬間として再解釈されているのである。¹³⁾

受賞演説の前半部におけるモリソンの主張は、「小鳥と言葉」と「バベルの塔」の2つのたとえ話に集約される「死んだ言葉」への厳しい批判である。「公用語」のような特権的な地位にある言葉が、その地位を利用して支配的な言葉として君臨すること。時には硬直化した単一の言葉が、特定の活動領域において権力を有すること。いずれの場合も、特権化されていない言葉が、従属的で周縁の位置においやられている。単一の言葉が支配している言語状況では、私たちの知識は限定され、発展しない。ほかの言葉にとっても、単一の言葉による横暴は暴力であり、自由な活動が抑圧された状況である。バベルの塔が崩壊することで、多様な言葉が地上に散在し、この世が地上の樂園となったと考えるモリソンにとって、単一の言葉や思想による支配という形態は、樂園に君臨する暴君による支配を意味するのである。

モリソンの受賞演説は、アフリカ系アメリカ人の盲目の老婦人と子供たちの対話形式ですすめられる前半部と、子供たちが彼女の「生きた言葉」の命に触れて、自分自身でそれを語りだす後半部から成る。老婦人の知恵の深さを悪意をもって確めるために訪問した子供たちは、後半部では彼女の語る言葉に心を開き、「生」と「死」の真の意味¹⁴⁾などについて、彼女に相次ぐ質問を浴びせる。しかし、彼女は沈黙をとおす。深い沈黙を前にして、子供たちは老婦人が語ったであろう答えを、質問の形式で彼女の代わりに語り始める。そして、彼らの言葉が、先祖が奴隷だったころの歴史を再生し始めるのである。

Tell us about ships turned away from shorelines at Easter, placenta in a field.
Tell us about a wagonload of slaves, how they sang so softly their breath was
indistinguishable from the falling snow. How they knew from the hunch of the
nearest shoulder that the next stop would be their last. How, with hands prayed
in their sex, they thought of heat, then sun. Lifting their faces as though it
was there for the taking. Turning as though there for the taking.¹⁵⁾

11) *The Nobel Lecture in Literature, 1993*, 19.

12) 複数言語が共時的に存在することへのモリソンの憧憬は、たとえば “Unspeakable Things Unspoken: The Afro-American Presence in American Literature” (1989)などの論文において、彼女が主張してきた点に通じるものがある。モリソンは、アメリカ文学史において、アフリカ系アメリカ人作家や女性作家などによる作品を長いあいだ周縁に追いやり、単一のパラダイムだけを評価する文学批評を批判してきた。複数の文学パラダイムや複数言語が対等に存在することを認めない傾向という単一のものだけへの偏向にたいして、モリソンは警告の姿勢を貫いている。

13) Nancy J. Peterson, “Introduction: Canonizing Toni Morrison,” *Modern Fiction Studies* (39. 3&4, Fall/Winter, 1993), 472. “Re-vising the traditional interpretation of the biblical story, Morrison suggests that the Tower of Babel represents a moment when humans could have realized paradise on earth in the form of a fecund diversity of languages and perspectives.”

14) *The Nobel Lecture in Literature, 1993*, 23.

15) *Ibid.*, 29.

このように演説の後半部は、前半部で小鳥にたとえられていた「生きた言葉」の実例が示される。「生きた言葉」を用いると、想像力を用いて自由に過去の話を再生することさえも可能となる。

「生きた言葉」の力を得た子供たちにたいして老婦人は沈黙を破り、演説の最後を以下の言葉で終える：“I trust you with the bird that is not in your hands because you have truly caught it. Look. How lovely it is, this thing we have done—together.”¹⁶⁾ 「生きた言葉」は、想像力によって世界を構築する力をもつばかりではなく、それを用いる者たちに信頼の念を抱かせ、交流させ、和解させる力をもつものでもある。「生きた言葉」が、それを使用する者と一体化した新しい空間。特定の言葉のみが権力をもたず、対等な関係のもとに共存する「生きた言葉」が往き来する言語空間。モリソンの憧憬は、そうした空間に向けられている。

[2]

モリソンのノーベル文学賞受賞演説には、アフリカ系アメリカ人に属する作家自身のエスニシティにたいする意識が色濃くうちだされている。演説をとおして、私たちはアフリカ系アメリカ人の老婦人の声を聴き、彼女と対話する子供たちが再構築する、彼らの先祖の歴史を知る。アフリカ系アメリカ人の歴史を言語の剥奪、強制、禁止としてとらえ直そうとする試みは、前章でみた「死んだ言葉」である「公用語」と「弾圧する言葉」への批判や、バベルの塔のたとえ話にみる複数の言葉が共存することを賛美する、モリソンの言語観に拠るものである。

アフリカ系アメリカ人であるモリソンの祖先は、奴隷貿易によって新世界に連れて来られた。旧世界の異なる出身地から強制移住させられた異なる部族に属する彼らは、共通の言葉をもたずに新世界に渡った。複数の多様な言葉が存在する旧世界¹⁷⁾とは異なり、彼らが連れて来られたアメリカは、英語という単一言語が支配する世界であった。その地で、彼らは単一の公用語として英語を押しつけられることとなる。新世界に渡ったアフリカ系アメリカ人以外の移民たちも母語と英語とのあいだの葛藤を経験しているが、モリソンの祖先たちは奴隷という被支配身分におかれ、強制的に母語を剥奪されたという違いがある。¹⁸⁾ほかの移民たちが新世界にたくした夢や希望の実現のために英語を学ぼうとしたのとは異なり、奴隷であった彼女の祖先たちは暴力の一形態として英語の強制を経験した。彼らにとっては、英語は支配者の用いる支配の道具としての言葉にすぎない。このことは単に言葉だけではなく、母語によって営まれてきた思想や文化、旧世界では与えられていた人間性の尊厳や自由をも剥奪することを意味した。彼らは、樂園を追われ、暴力の犠牲者となった。

アフリカ系アメリカ人の母語と英語の関係をめぐる歴史には、3度に及ぶ支配と抑圧、剥奪と強要という悲劇が起こっている。1度目は、旧世界で使用されていた母語を奪われ英語を強要された悲劇。2度目は、強要された英語を剥奪された悲劇である。独立戦争以前、ニューイングランドなどの一部の地域では、宗教的な理由から、奴隷への読み書きは禁止されていなかっ

16) Ibid., 30.

17) 「このような多様な部族は、共通の言語——「アフリカ語」——を持たなかった。事実、今日ナイジェリアだけで二百以上の異なる言語がある。」ベンジャミン・クォールズ、明石紀雄、岩本裕子、落合明子訳、『アメリカ黒人の歴史』（東京：明石書店、1994）、13.

18) 完全に母語が剥奪されたわけではなく、たとえば、サウスカロライナとジョージアの海岸地方に住む黒人の語彙には、「統語法、語尾変化、発音、抑揚の面での多くのアフリカの遺物に加えて、四千語に及ぶアフリカの言葉」が発見されたという。（クォールズ、32）.

た。しかし、奴隷制が強化されていく過程において、彼らは読むことから書くことから遠ざけられてしまう。アフリカ系アメリカ人は、母語を剥奪されて英語を強要される世界に移されたにもかかわらず、その支配言語を習得することも禁じられた。奴隷制下において、彼らは支配のために必要な言語活動以外を許されぬ存在となる。

こうした2度目の悲劇は、たとえば、1818年に奴隷としてメリーランド州に生まれたFrederick Douglassの自伝、*Narrative of the Life of Frederick Douglass: An American Slave* (1845)にみることができる。奴隷たちは母語を奪った言葉である英語を拒絶するのではなく、英語をとおして、彼ら自身の声、言葉を獲得しようと懸命に努めた。ダグラスの自伝は、奴隷に読み書きを教えることが禁じられていた状況において、奴隷が独学で言葉を習得する過程の並々ならぬ努力と、アメリカにおいて英語を習得することの意義がいかなるものであったのかを伝えている。この自伝自体、習得された英語がもたらした一つの成果なのである。

20才で北部に逃亡するまで、ダグラスは南部の奴隷市場で幾度も売買される。Master Hugh Auldの奴隷であったとき、Mrs. Auldが彼に読み書きの教育を始める。アルファベットの文字から始まり、3文字か4文字の単語を覚えだしたとき、オールド氏がダグラスの教育に気づき、奴隷に言葉を教えることは違法であると、それを固く禁じるように夫人に言う。

黒んぼはちょっとでも親切にするとつけあがるぞ。黒んぼは主人に従ってればいいんだ。しろと言われたことをしてればいいのさ。この世で一番の黒んぼでも、学問で駄目になっちゃうぞ。だから、もし君がああ黒んぼ（私自身のことを言ったのだが）に読み方を教えるなら、彼を置いとくわけにはいなくなる。永久に奴隷に向かなくしてしまうんだ。．．．彼自身について言えば、勉強は彼にとって何の役にも立たん。大きな害となるだけだ。不満を覚え不幸せになるだろう。¹⁹⁾

興味深いことに、オールド氏のこの言葉はダグラスを悲しませるのではなく、むしろ、いままでに経験してきた不可解な事柄の謎を解く鍵を彼に与えることとなる。「黒人を奴隷にする白人の力」に気づいたダグラスは、その瞬間から「奴隷制から自由にした小道」を知ることになる。²⁰⁾ダグラスは彼らと暮らした7年の間に、さまざまな機会を利用してなんとか読み書きの習得に成功する。家にたくさんあったパンと引き換えに、使いに出されるときに町で会う白人の少年たちから読み方を教えてもらったり、通行証に名前を書くためのために備えて「ダーギン・アンド・ベイリズ造船所(Durgin and Bailey's ship-yard)に行き、船大工たちが材木を切って使えるようにしたあと、その材木にそれが使われることになっている船の部分の名前を書くのをしばしば見たこと」²¹⁾や、主人たちに留守を任されたすきに、その家の息子の書き方の練習帳の書いてないところに文字を書き込むことなどとおして、文字を学んだのであった。

読み書きのできるようになったダグラスは、主人と奴隷の対話が書かれた“The Columbian Orator”という本を読むことによって、自分の思想を述べ、「奴隷制を支持せんとして始められる議論で論駁することができるようになった。」²²⁾そして、本を読めば読むほど、奴隷所

19) Frederick Douglass, *Narrative of the Life of Frederick Douglass: An American Slave* (NY: Penguin, 1982), 78. なお、本文中の引用には、岡田誠一訳、『数奇なる奴隷の半生』（東京：法政大学出版局，1993，p. 58-59）を使用した。

20) 『数奇なる奴隷の半生』，59.

21) Ibid., 70.

22) Ibid., 67.

有者たちがアフリカから自分たちを盗みだした泥棒であると考え、彼らのことを嫌悪するようになっていく。奇しくもオールド氏が言ったように、奴隷が読み方を覚え知識を得たことでダグラスは苦しみ、文字を読めない奴隷の愚かさを羨むようになる。²³⁾ しかし、時々耳にする「アポリシヨニスト」、「アポリション」の単語について、辞書では「廃止する行為」としか知ることでできなかったダグラスがその言葉の意味を知ることができたのは、偶然手に入れた奴隷貿易廃止を嘆願する記事を掲載した新聞を読むことができたからであった。それ以後、光を見いだすことができたと感じる彼は、これらの単語が話される場所に近づいては、逃亡への準備を進めるようになる。言葉が自由への道案内をすることとなったのである。

言葉は、ダグラスに自由をもたらすにとどまらなかった。北部逃亡後に発行した新聞²⁴⁾、自伝、演説に用いられた言葉をとおして、彼の思想は多くの人に共有され、多くの人に奴隷制の悪を訴えることとなる。彼の演説には、彼が数年前まで奴隷であったことを聴衆に信じさせないくらい、流暢で正確な語法が使用された。²⁵⁾ 彼の言葉はアフリカ系アメリカ人のみならず白人にも届き、エスニシティを越えて共感を呼びおこした。共通の言葉を強要されることは暴力的な行為である。しかし、言葉を共有する空間が拡大することは、強要された者の言葉を強要した者にはね返らせ、それを強要させるイデオロギーを解体していく結果にもつながりうる。

John Carlos Roweは、*At Emerson's Tomb: The Politics of Classic American Literature* (1997)において、ダグラスの自伝がいかに長いあいだアメリカ文学史の中に位置づけられてこなかったかを指摘しながら、この自伝を再解釈している。ロウは、言葉の権力によって奴隷制が維持されていることにダグラスが気づいた点を指摘する。²⁶⁾ 南北戦争前のオールド氏の夫人への言葉や、奴隷の読み書きを禁ずる奴隷制下での白人の言説は、奴隷の言葉に圧力をかけ、言葉を奪うことで、彼らから考える行為そのものを剥奪する「死んだ言葉」であった。まさに、白人の使用する英語が、奴隷制を成立させていたのである。

英語という言語が、奴隷制という暴力装置を機能させていた。英語を使用する者が、奴隷たちがそれを使用できないように弾圧すること。このことによって、英語を使用する者が、使用を禁止された者を支配する力関係が成立し、奴隷制のイデオロギーは安泰となる。支配者と奴隷の関係を生じさせるイデオロギーを解説する言葉を手に入れなければ、つまり、英語の読み書きができなければ、その支配のイデオロギーを機能させ続けることに奴隷も加担してしまうことになる。両者が対等に英語を読み書きできるようになってはじめて、支配する者と支配しない者の力関係が崩れる可能性が生じる。ダグラスを北部に逃亡させ自由にしたのは、彼の体力、気力、希望への憧れの強さといったものはもとより、なによりも、習得した英語が彼に与えた言葉の力であった。支配者と共有できる言葉が、彼に知識を授け、自由へと導く力となっ

23) たとえば、*In Love and Trouble* (1973) に所収されているAlice Walkerの短篇“Her Sweet Jerome”には、“revolution”の単語の意味も理解できないジェローム夫人が狂気に陥る悲劇が象徴的に描かれている。彼女は夫を愛しながらも、彼が傾倒する奴隷制廃止運動の思想を理解することができない。夫と精神世界を共有できない彼女のいらだちは、理解できない夫の読んでいる本／文字に向けられ、本／文字のある部屋に身を置いた彼女はそこに火を放ってしまう。文字を理解できる者とできない者の間には、夫婦といえども精神的な大きな隔たりを生じさせてしまう悲劇が描かれる。

24) Benedict Andersonは *Imagined Communities* (London: Verso, Revised Edition, 1991. p. 33-36)において、ナショナリズムの起源を心の中にイメージされる「想像」に見いだすが、国家や国民を結びつける「想像」の媒体として、本の一形態としての新聞とその市場の重要性を指摘する。

25) 「訳者あとがき」、ダグラス、170。

26) John Carlos Rowe, *At Emerson's Tomb: The Politics of Classic American Literature* (NY: Columbia UP, 1997), 107.

たのである。南北戦争前、支配者の言葉を自在に操ることは支配に屈することではなく、奴隷制のイデオロギーに取り込まれないために、防衛手段をもつことを意味した。さらには、ダグラスのように独力で習得された支配者たちの言葉は、支配者のイデオロギーを崩す原動力となっていた。戦後においても、アメリカを動かしている大きなイデオロギーに取り込まれず、それを動かすためには英語の習得が必要であった。

アフリカ系アメリカ人の教育の権利と英語の習得が認められた南北戦争後でも、彼らが英語を学習することには困難が伴っていたことは、たとえば、Booker T. Washingtonの*Up From Slavery* (1901)にみることができる。それまで、教育の機会を与えられたことのなかった彼らに学校の組織はなく、教師となれる読み書き能力をもつ同胞も簡単には見つからなかったからである。しかし、英語を習得するのは困難な過程であっても、それを習得することへの願望は強いものであった。字の読める少年がいることが分かると、仕事が終わるとほとんど毎日、新聞に書いてあることを聞きたがった一団の男女が彼を囲んだものだとワシントン回想する。²⁷⁾

支配言語に母語を奪われ、さらに、新世界で使用される言葉の習得までも弾圧された歴史をもつアフリカ系アメリカ人を襲った英語をめぐる3度目の悲劇は、ブラック・イングリッシュの抑圧である。母語を奪われたにも関わらず、それを奪った英語を習得することが必須であったアフリカ系アメリカ人は、新世界において彼らの新しい母語を作りだした。それがブラック・イングリッシュである。モリソン自身、これを“my language”と呼び、尊重しようとしている。²⁸⁾モリソンは、“What do you think is distinctive about your fiction? What makes it good?”との質問に、このブラック・イングリッシュの使用をあげる。

The language, only the language. The language must be careful and must appear effortless. It must not sweat. It must suggest and be provocative at the same time. It is the thing that black people love so much—the saying of words, holding them on the tongue, experimenting with them, playing with them. It’s a love, a passion. Its function is like a preacher’s....²⁹⁾

モリソンは、アフリカ系アメリカ人自身の話を語るには、彼らを奴隷とした歴史をもつ白人の言葉、スタンダード・イングリッシュでは語ることができない部分もあると考える。そして、小説の中でブラック・イングリッシュを甦らせるために、スタンダード・イングリッシュを用いると語る：“I want to use it to help restore the other language, the lingua franca.”³⁰⁾スタンダード・イングリッシュを用いることは、奴隷制を経てやっとの思いで獲得した権利であり、被支配者に戻らない方法でもある。しかし、アフリカ系アメリカ人は英語を使用しながらも、支配者の言葉に消されてしまった自分たちのエスニシティの痕跡を残す言葉を生みだしていたのである。

白人の用いるスタンダード・イングリッシュだけを英語の中でも単一の公用語として扱い、それとは語法や単語が異なるブラック・イングリッシュを周縁の立場に追いやる今日の言語事情は、前者が「死んだ言葉」であるというモリソンの批判につながっていく。学校教育をうけるようになった子供たちが、それまで家庭で用いていたブラック・イングリッシュを矯正され、

27) Booker T. Washington, *Up from Slavery* (NY: Penguin, 1986), 28.

28)-31) Thomas Leclair, “‘The Language Must Not Sweat’: A Conversation with Toni Morrison,” *Toni Morrison*, eds. Henry Louis Gates, Jr. (NY: Amistad, 1993), 373.

スタンダード・イングリッシュを強要されていく過程をモリソンは特に憂慮する。

The worst of all possible things that could happen would be to lose that language. There are certain things I cannot say without recourse to my language. It's terrible to think that a child with five different present tenses comes to school to be faced with those books that are less than his own language. And then to be told things about his language, which is him, that are sometimes permanently damaging. He may never know the etymology of Africanisms in his language.... This is a really cruel fallout of racism.³²⁾

言葉の使用を抑圧することは、その言葉の背景にある彼らのエスニシティや精神性を否定するだけでなく、劣った言葉を話す民族に属しているという劣等感を抱かせることにつながるとモリソンは危惧する。新たな「人種差別」を生みだし、自らの言葉のもつエスニシティを静かに抹殺していく過程は、「死の灰」になぞらえられる。

Ernest Renanは“What is a Nation?”において、植民地化／被植民地化の歴史における重要な要素として宗教と言語の2点を挙げる。³²⁾ また、Etienne Balibarは“The Nation Form: History and Ideology”で、エスニシティの形成は、言語と人種の両者の作用によると指摘する。³³⁾ 複数言語が一つの国家に存在した近代以前の国家には、通訳の制度が発達していたというが、たしかに、一つの国家に複数の言語が存在し、相互間の意志疎通が簡単にはかれない状況下では、政治、社会、文化のさまざまな側面において、共通のコードや規範の確立は困難であろう。共通の言葉を使用することは、国家の統一においては避けられない要因なのかもしれない。しかし、バリバーがいうように、言語と人種の二つの要素がエスニシティを形成するのであれば、共通の言語を強要させられることで民族の独自性を奪われた人たちは、同化を強制されることによって人種の違いを強調されることとなり、支配される人種としての屈折した劣等感をもったとしても不思議ではない。

1925年にマルチニク島に生まれたFrantz Fanonは、『黒い皮膚・白い仮面』（1951）において、植民地化された民族の一つの言語状況を記している。

アンティル諸島の黒人は、フランス語を自分の国語とすればするだけ、より一層白人に近くなる、言いかえれば、より一層本当の人間に近づいていく、ということ。... 植民地化された民族は全て——言いかえれば、土着の文化の創造性を葬り去られたために、劣等コンプレックスを植えつけられた民族はすべて——文明を与える国の言語に対し、すなわち本国の文化に対して位置づけられる。植民地の原住民は、本国の文化的諸価値を自分の価値とすればするだけジャングルの奥から抜け出したことになる。皮膚の黒さ、未開状態を否定すればするだけ、白人に近くなる。³⁴⁾

32) Ernest Runan, “What is a Nation?,” *Nation and Narration*, ed. Homi K. Bhabha (London: Routledge, 1990), 10.

33) Etienne Balibar, “The Nation Form: History and Ideology,” Etienne Balibar and Immanuel Wallerstein, *Race, Nation, Class* (London: Verso, 1991), 96.

34) フランツ・ファノン, 海老坂武, 加藤春久訳『黒い皮膚・白い仮面』（東京: みすず書房, 1998）, 40-41.

支配者の言葉話し、彼らの価値観を身につけた者だけが「本当の人間」とみなされる。母語を話す者は、人間ではないという意識をもたされ、限らない自己否定の過程を辿ることとなる。人種、エスニシティ、使用する言語というものは、お互いに絡み合いながら、人間の尊厳を形づくっているのである。

強制される支配言語はダグラスに奴隷制への戦略を授け、彼はそれを戦う武器とした。しかし、学校教育の場において、共通の言葉を強要され、また、それを使用するのが「本物の人間」であるという支配者のイデオロギーに無意識に組み入れられてしまう過程をとおして、アフリカ系アメリカ人は、エスニシティもその文化の痕跡も、無意識のうちに抹消されてしまう危険にある。母語を剥奪し「忘却」³⁵⁾ させようとする操作、皮膚の色を含めた完全なる自己否定。過去から離脱すればするほど、そして、植民者の価値観を身につけるほど、「本物の人間」に近づいているのだと感じる植民地操作に組み入れられたアフリカ系アメリカ人が、「白い仮面」の下の「黒い皮膚」に誇りをもてなくなり、「黒い皮膚」の言葉を抹消しようとしたとしても不思議ではない。

支配者の言葉が、アフリカ系アメリカ人の言葉を剥奪しようとするダイナミズムは今日でも繰り返されている。支配的な権力をもつ言葉が、複数の言葉の存在を弾圧すること。白人の用いる英語による暴力は、いまだにアフリカ系アメリカ人の言葉を襲っているのである。³⁶⁾ 奴隷船から新大陸に降り立って以来、自らの言葉を剥奪され、抑圧され、蔑視され、周縁に追いやられてきた彼らの言葉の歴史は、いまだ、閉じられてはいない。

[3]

古くはW. E. B. Du Boisの*The Souls of Black Folk* (1903)にみられるように、アフリカ系アメリカ人作家の作品には、「黒い皮膚」をもちながら「白い仮面」をつけて執筆すること、すなわち、祖先の母語や文化を奪った支配言語である「英語」を用いて執筆することにたいする二重意識との葛藤がみられる。³⁷⁾ 彼らはこの二重意識に苦しみながら、自分自身について、また、彼らの民族の過去や歴史について話したり、書いたりする言葉を模索してきた。たとえば、Rebecca Fergusonは、アフリカ系アメリカ人作家に一般的にみられる二重意識をつぎのように要約する。

... [B]lack writers find themselves in a complex position; theirs is a history of

35) Runanは、征服者が被征服者にたいする国家統一の手段として、母語を「忘却」させる有効性を指摘している。(Runan, 10).

36) 「一昨年(一九九六年)、カリフォルニア州オークランドの教育委員会で、アフリカ系アメリカ人の中高生の英語教育の充実のための新案が決定された際に起きた、ブラック・イングリッシュの定義に関してメディアを賑わした論争はまだ記憶に新しい。」(吉田由子、『トニ・モリソン』、東京: 清水書院, 1999), 220. 「ブラック・イングリッシュは、“Ebonics”あるいは“African American Vernacular English (AAVE)”とも呼ばれている。論争は、この英語が単なる一方言なのか、それとも一言語なのかということにあったが、もし単なる一方言だとしたら、それを話す生徒がスタンダード・イングリッシュを習得するために、外国語を話す学生の場合と同様の特別の教育的措置をとることが妥当かという問題をめぐって起きた。アメリカ言語学協会は、ブラック・イングリッシュは、独自のシステムを持った言語で、文法破格の下品な方言ではなく、この言語は保全すべき価値があり、この言語を話す人々の利益は守られるべきものであるとの見解を発表している。」(吉田, 224-225).

37) Roweは*At Emerson's Tomb*の第11章 (pp. 222-246) “The African-American Voice: William Faulkner's *Go Down, Moses*”で、この問題を詳しく論じている。

oppression, but one that must be remembered and accounted for, and while the language of the dominant culture and the written word itself have all too often been potent instruments in that oppression, not to have mastery of them is to be rendered impotent in ways that matter greatly.³⁸⁾

ノーベル文学賞受賞演説、数々のインタビューやエッセイ、小説に表わされるモリソンの言葉への感性は、アフリカ系アメリカ人自身の母語と「英語」という2つの言語間で揺らぐ、彼女の言語観を映しだしている。ダグラスが奴隷制廃止論の思想を共通の言葉を用いることで広く訴えることが可能となったように、アフリカ系アメリカ人小説家のモリソンは「英語」を用いて執筆することで、彼女の言葉を多くの人に共有させることを可能とする。しかし、武器であるはずの言葉を使用することは、その背後に潜む支配者のイデオロギーにからめ取られてしまう危険が伴っていることでもある。1992年に出版された*Playing in the Dark*において、モリソンは、言語を使用することに伴うこうした危険性を指摘する。二重意識³⁹⁾と葛藤しながらも、英語を武器として使用している作家モリソンの、自分自身にたいする警告でもある。

一つの民族の所有する言葉は、その民族の歴史や文化を包括するものである。アフリカ系アメリカ人の言葉を操作してきた歴史をもつ「英語」が、その支配の歴史を含めてありのままのアフリカ系アメリカ人の姿を表象することはありえない。言葉がさまざまなイデオロギー操作から完全に解放されることなどありはしない。モリソンの講演が意図することは、そうした言葉に潜むイデオロギーを明るみに出すことである。異民族の言葉によって表象されるアフリカ系アメリカ人像にたいして抱いたモリソンの違和感が、3章で構成されている*Playing in the Dark*の主張の基調となっている。この著作の意図することは、前書きにおいて、つぎのように述べられる。

... first in the pervasive use of black images and people in expressive prose; second, in the shorthand, the taken-for-granted assumptions that lie in their usage; and, finally, to the subject of this book: the sources of these images and the effect they have on the literary imagination and its product.⁴⁰⁾

英語で「黒い」と表わすとき、それは物理的な事実にとどまらず、さまざまな含意をもつ。それは表象言語特有のイデオロギー体系にのっとったものであるということを、モリソンは指摘する。支配者の言葉がアフリカ系アメリカ人を「黒い」と表象するとき、それは“notions of excessive, limitless love, anarchy, or routine dread”⁴¹⁾という含意をもつ。

38) Rebecca Ferguson, “History, Memory and Language in Toni Morrison’s *Beloved*,” *Feminist Criticism: Theory and Practice*, ed. Susan Sellers (Hemel Hempstead: Harvester Wheatsheaf, 1991), 109.

39) 西洋のフェミニズム理論(特にFrench feminism)においては、男性が支配する言語体系を用いて執筆することへの懐疑を女性作家たちが根強く感じているように、モリソンをはじめとするアフリカ系アメリカ人女性作家たちは、アフリカと西洋の伝統、また、女性と男性との伝統のあいだの2つの「二重」意識を経験している。

40)-41) Toni Morrison, *Playing in the Dark* (London: Picador, 1993), xii. たとえば、Henry Louis Gates, Jr. は、西洋の言語体系における“black self”は“a figure of absence, a negation”を表わすと指摘する。(*Black Literature and Literary Theory*. London: Methuen, 1984, p. 7).

また、たとえば、文学作品の中のアフリカ系アメリカ人の発話に表れる方言や文字の綴りが歪められて描かれていることを指摘し、そこに、アフリカ系アメリカ人にみられる他者性を強調する著者の意図を読みとりもする。⁴²⁾ アフリカ系アメリカ人以外のエスニシティをもつ作家によって書かれた文学作品から、モリソンが具体的な例をいくつもあげて明らかにしようとしていることは、言葉がヘゲモニーを内包し、文学作品をとおして、それが無意識のうちに読者の意識に入り込んでしまう事実である。

ヘゲモニーを含意している英語という言語体系を用いて、アフリカ系アメリカ人たちはいかに彼ら自身を表象すればよいというのであろう。言葉というものは、被支配者を表象するときには差別の含意をはらむものとなり、「死んだ言葉」として機能する可能性をもつものであることを、モリソンは英語を武器として訴える。モリソンが成し遂げようとしていることは、アフリカ系アメリカ人が言葉を奪われているときにはできなかったことであり、英語を使用することで始めて可能となることである。彼女は自らの務めを、つぎのように表明する。

... I am a black writer struggling with and through a language that can powerfully evoke and enforce hidden signs of racial superiority, cultural hegemony, and dismissive "othering" of people and language which are by no means marginal or already and completely known and knowable in my work.... The kind of work I have always wanted to do requires me to learn how to maneuver ways to free up the language from its sometimes sinister, frequently lazy, almost always predictable employment of racially informed and determined chains.⁴³⁾

奴隷制を有していた過去があり、奴隷制廃止後も今日にいたるまで根強く残る人種差別を抹消できないアメリカでは、人種のヘゲモニーがその言葉に影響していることは当然のことであろう。モリソンは、言葉自体が政治性をもつものであることを明らかにし、その言語体系を機能させている支配の構図を徹底的に弾劾しようとする。アメリカは、国家の統一のために、アフリカ系アメリカ人を他者として隷属化した。それは、奴隷制やさまざまな人種差別の形態をとおしてなされたが、なによりも、使用言語自体に目に見えない政治力を持たせることで隷属化を強化した。モリソンの批判は、政治力を付された言葉ばかりか、そのような言葉を生みだしたアメリカ国家そのものにまで及ぶ。

... [I]n the absence of real knowledge or open-minded inquiry about Africans and African-Americans, under the pressures of ideological and imperialistic rationales for subjugation, an American brand of Africanism emerged: strongly urged, thoroughly serviceable, companionably ego-reinforcing, and pervasive. For excellent reasons of state—because European sources of cultural hegemony were dispersed but not yet valorized in the new country—the process of organizing American coherence through a distancing Africanism became the operative mode of a new cultural hegemony.⁴⁴⁾

42) *Playing in the Dark*, 52.

43) *Ibid.*, xii-xiii.

44) *Ibid.*, 8.

政治性をおびた言葉といった抽象的なものだけでなく、その言葉を存続させるアメリカの国家／政治形態をも弾劾するきわめて政治的な小説家、モリソンの姿がある。言葉は政治的なものである。そして、言葉を駆使する「作家」は、それを政治的武器に転化させるのである。

強制移住によって母語から切り離された環境におかれ、奴隷制下では強制的に読み書きを禁じられていたアフリカ系アメリカ人と「英語」の関係は、現在でも学校教育の場でスタンダード・イングリッシュが使えるように矯正しようとする外的な支配の形をとることもある。自らの人種にたいする劣等感という目にみえない心の傷をうえつけ、また、読書を通じて無意識のうちに悪意に満ちた人種差別をしていくという点では、外的な支配や暴力よりも、より巧妙なイデオロギー操作がなされているともいえよう。巧妙さゆえに、そのヘゲモニーは日常の言葉の中に潜みながら言語体系を活かしており、その存在を見抜くこと自体、困難なこととなる。しかし、モリソンは、英語を武器とすることで、その矛盾を共有させようと戦っている。彼女が英語を用いなければ、その悪意にみちた言語体系は支配者が占有するだけで、どんな小さな差別も暴かれることなく、次世代へと引き継がれ、言葉の継承とともに、そこに隠されたヘゲモニーも永遠に繰り返されることになってしまうであろう。

[4]

(1)

トニ・モリソンの第5作品目の小説*Beloved* (1988)は、南北戦争前には農園Sweet Homeの奴隷であったSetheと、彼女をめぐる数人の登場人物たちの回想をとおり、アメリカの歴史から消されてきた奴隷制を再構築している作品である。奴隷制を機能させていた白人、そして、あまりにも過酷な過去ゆえに、忘却することで新しい生を得ようとするアフリカ系アメリカ人。この両者による二重の消去作用によって、奴隷制の歴史は封じ込められてきた。しかし、モリソンは、人間性をふみにじられた奴隷たちを祖先にもつ者にとって、目をそらさずにはいられない悲惨な奴隷制という過去を、「英語」を武器に暴いていく。

*Beloved*は、1873年の夏にスウィート・ホームでセスと共に奴隷だった過去をもつPaul Dが、彼女が娘のDenverと二人で暮らす124番地の家を訪れるところから始まる。この小説では、ポール・Dとセスが再会した1873年の夏から、彼が過酷さゆえに目をそらそうと努めていた自らの過去に正面から対峙し、セスの過去も負いながら新しい生活をふみだすために、一度は逃避した124番地に再び戻ってくるまでの一年間が描かれる。この一年間の時間は、登場人物たちが経験した各々の過去の時間と複雑に交差し合う。

二人の息子と娘をスウィート・ホームから先に逃がし、セスの夫Halleの労働によって自由を買い与えられていた義母Baby Suggsの住む124番地の家に一人で逃亡したセスは、逃亡中に白人の娘に助けられながらデンヴァーを出産した。しかし、逃亡奴隷を追って来たスウィート・ホームのSchoolteacherと彼の甥たちが124番地にいる彼女たちを発見したとき、セスは先に逃がした娘を殺し、生まれたばかりのデンヴァーと牢獄に入れられていた過去があった。124番地を訪れたポール・Dは、セスたちとは古い知人であるStamp Paidから彼女の子殺しの過去を告げられ、彼女のもとを逃げ出す。124番地では、殺した娘が生き返ってきたかのように象徴的に描かれる*Beloved*がセスを狂気に陥しいれていくのだが、共同体の女性たちの力によってピラヴィドは姿を消す。ピラヴィドが消えたところにポール・Dが戻り、奴隷制がもたらした各々の耐え難い過去を負いながら、セスと共に新しい人生を始めようと決意するところで小説は閉じる。

ベビー・サッグス亡き後、セス、デンヴァー、そしてポール・Dが暮らしている124番地の

家に、ピラヴィドは突然やってきて一緒に住むようになっていた。彼女は奴隷たちが共有する歴史は消されてはならないことをセスに気づかせるかのように、過去の話やせがみ、それを甦らせていく。セスが語る言葉は甘い物が与えるのと同じような満足をピラヴィドにもたらし、密閉されていた耐え難い過去を話すことは、予想に反した満足をセスにももたらす。痛みを伴うのでデンヴァーやポール・Dにさえも話すことができなかつたことを、セスは驚きを感じながらもピラヴィドには語るできるのであった。⁴⁵⁾ 小説の後半では、母であるセス自身が生き返った娘であると認めたピラヴィドに語られることをとおして、奴隷制の歴史が再現されていくために、*Beloved*は母性や母と娘の関係といった女性の経験を強く感じさせる作品となっている。

スウィート・ホームの所有者である「先生」と甥たちに「ミルクを盗まれ」、白人の少女の助けを借りて苦しみながら出産し、奴隷の身分におきたくないという強い母性愛から子殺しを犯し、また、自分のセクシュアリティを墓石職人に10分間売ると引き換えに、娘の墓に“Beloved”の7文字を掘らせたものの“Dearly”といえられなかったことに罪悪感を覚えたりと、セスが自らの歴史から消し去りたいと望んだ過去の多くは、女性のセクシュアリティに深く関わるものである。セスの盗まれたミルク、出産の際に流れた羊水や血液、子殺しのときに流れた血液が、セスのセクシュアリティと肉体の経験した苦痛を鮮明に甦らせる。

セスが語る、断片的な過去の記憶から解放されることのない「現在」は、彼女だけに属するものではない。それは、個人の歩んできた経歴を越え、奴隷の女性たちが共有する過去の歴史を映しだしている。セスに子殺しを犯させた奴隷制の過酷さ、その経験がもたらす精神的な苦痛。また、彼女の肉体に加えられた数々の物理的暴力は、アフリカ系アメリカ人女性たちの苦難の歴史でもある。「セス」という多くの女性たちが経験した苦痛の歴史に焦点をあてることは、消去されてきた奴隷制の一つの現実を暴くことになる。しかし本章では、アフリカ系アメリカ人女性の歴史がもたらす強烈な印象によって隠されがちとなる、奴隷制の歴史の一端を考察したい。すなわち、*Beloved*が、女性たちの身体が被った物理的暴力に匹敵する悲劇として、アフリカ系アメリカ人が新世界で経験した「英語」との葛藤の歴史を再現した作品であることを明らかにしたい。

*Beloved*は、アフリカ系アメリカ人の使用言語と支配言語の葛藤の歴史を再現することで、人間の言葉との関係が、奴隷たちの肉体に向けられた暴力の過酷さにもまさる苦難となりえたことを明らかにする。支配者の用いる英語が、奴隷個人の、そして奴隷制という悲劇を生みだしていた現実が浮きぼりにされる。言葉は、奴隷制が肉体的／精神的暴力を奴隷にもたらしたほかの手段と同様、彼らに厳しい試練を強いた一因であった。この小説において、愛情をもつことが禁じられた身分であるにもかかわらず、愛をもったゆえに子殺しを犯してしまったアフリカ系アメリカ人女性の悲劇を中心に据えながら、アフリカ系アメリカ人と「英語」の関係も忘れてはならない奴隷制の悲劇であることが強調されている。*Beloved*は、言葉をめぐるアフリカ系アメリカ人の歴史を再構築した、作家モリソンの言葉への関心が強く映しだされた作品なのである。

(2)

*Beloved*には、新世界に渡らされたアフリカ系アメリカ人一世たちが経験した、言葉の歴史が描かれている。アフリカから新世界に連れて来られた奴隷は、その後も旧世界の母語を用い

45) Toni Morrison, *Beloved* (NY: Penguin, 1988), 58. 以下、引用はこの版により、頁数は引用末括弧内に示す。

ていた。セスのような奴隷の子供は生後すぐに世話係の奴隷に預けられ、労働に拘束されている実の母親に会うことはほとんどない。母のことは、わずかな記憶と、生れたばかりのセスを養育していた世話係の奴隷Nanの語ったことに拠るしかない。セスは、スウィート・ホームで労働する以前の記憶があまりにも少ないことに気づき、彼女の母とナンがほかの者とは違った言葉を用いていたことに思いあたる。さまざまな部族出身の異なる言葉を用いた奴隷たちは、共通の言葉をもたず、また、現在、セスが用いる英語とも違う言葉話していた。ナンたちと暮らした時期の生活は、今では忘れてしまったアフリカ系アメリカ人の母語が使用されていたため、ナンが語った内容も思い出すことはできない。母語が英語にとって代えられていく過程で、母語の背景となった文化や歴史は、それを理解するための言葉を失い、思い出されることがなくなっていくのだ。母語の剥奪は、その言語体系を維持していた文化的基盤を喪失させることをも意味することとなる。

[Nan] used different words. Words Sethe understood then but could neither recall nor repeat now. She believed that must be why she remembered so little before Sweet Home except singing and dancing and how crowded it was. What Nan told her she had forgotten, along with the language she told it in. The same language her ma'am spoke, and which would never come back. (62)

強制される言葉は、一つの民族の言葉やそれが生み出す文化をも分断していくのだ。

スウィート・ホームの奴隷の一人であったSixoの母語と英語との関わりは、両方の言葉を操ることができたアフリカ系アメリカ人の世代にみる一つの経験を表わしている。シックスウの言葉との関係は、一つの言葉を使用していた者が強制的にはかの言語空間に入れられるという現実が、違和感なしには受け入れられてはいなかったことを示している。英語と母語を使い分け、ポール・Dには理解できない言葉の唄を歌いながら白人に殺されていくシックスウは、奴隷の英語にたいする一つの考え方を体現している。

スウィート・ホーム農場の経営者であるGarner氏は、奴隷の自主性を尊重し、彼らの意見／言葉にも耳を傾ける奴隷所有者であった。ガーナー氏の奴隷だったとき、ケンタッキー州の中の全ての黒人の中でスウィート・ホームの奴隷である5人だけが本物の男であると誇りに思えたほど、そこでの生活は、当時の奴隷としては優遇されたものであった。⁴⁶⁾ ポール・Dの回想によると、その頃は、シックスウは英語を話していた(21)。ガーナー氏亡き後、スウィート・ホームの経営が「先生」の手にわたると、奴隷たちの人間性は全て否定されるようになる。すると、シックスウは“there was no future in [English]”(25)という理由から、英語を話すのをやめてしまう。そして、彼らが逃亡を企てるようになったとき、再び英語を話すようになっていたという。シックスウにとっては、母語だけが彼に残された人間性の証だったのである。使用する言葉の選択は支配者にたいする感情を示しているだけでなく、言葉を選択できる

46) 実際、彼らの声／言葉はスウィート・ホームの中だけで通用するものであり、そこを出るとそれは人間の言葉とみなされなかったことが指摘される：“Watchdogs without teeth; steer bulls without horns; gelded workhorses whose neigh and whinny could not be translated into a language responsible humans spoke” (*Beloved*, 125)。「スウィート・ホーム」という名前自体が、奴隷制においては皮肉な欺瞞であった。

ことが、奴隷自身のアイデンティティーを確認するわずかに残された術であったことを示している。

奴隷たちにとって、英語は奴隷制における支配者の言葉であった。奴隷と所有者のあいだにわずかにしる人間的なつながりがあれば、支配者の言葉話すことは容易なことである。しかし、そのつながりが消え、奴隷の人間性を抑圧し完全に支配するようになると、支配者の言葉である英語を話さないことで彼らを拒絶するようになる。シックソウが逃亡を計画中に再び英語を話すようになったというのは、逃亡後の未来という希望が生まれたために支配者を拒絶する必要が薄らいだことと、ポール・Dにも理解できない母語をもつシックソウが、逃亡の細かい計画を共通の言葉で正確に打ち合わせる必要を感じたからとも考えられよう。英語は拒絶したい支配者の言葉であると同時に、自由を達成するための情報伝達には不可欠な、奴隷のあいだの共通言語でもあった。

(3)

南北戦争後、英語の読み書きができないアフリカ系アメリカ人の生活は、書き言葉がなくとも不自由のない、独自の様式によって営まれていた。サーカスに向かうセス、デンヴァー、ポール・Dは、文字の読めるアフリカ系アメリカ人たちが声にだして知らせることで、広告に書かれた出し物の内容を知って気分が高められる。文字が読める者が宣伝を声にだして読み、読めない者はそれを聴いた(48)。文字を読まなければならない必要はなく、文字を読めない者が取り残されることもない。読めない者と読める者が自然に共存する世界がある。またポール・Dは、名前を尋ねると注意深く明瞭に発音して答えるピラヴィドの返答の仕方に、自分の名前を読み書きすることもできないアフリカ系アメリカ人に共通の特徴を感じる：“He recognized the careful enunciation of letters by those, like himself, who could not read but had memorized the letters of their name” (52)。彼らのあいだでは、名前の発音一つが、読み書きができないことを示す記号として通用している。また、124番地に届けられる差し入れの料理が入った容器には、届けた者の名前の代わりに記号が書かれている。アルファベットで名前を綴れない黒人たちは、その代わりに記号を用いていた。アフリカ系アメリカ人の共同体では、その記号が誰のものであるかは周知のことで、デンヴァーは分からない記号の持ち主をLady Jonesに尋ねに行く：“Many had X’s with designs about them, and Lady Jones tried to identify the plate or pan or the covering towel” (249)。

セスが子殺しの罪で投獄される前、息子に自由を買い取ってもらったベビー・サグスは、開拓地で御言葉(“the Word”)を語る呼びかけ(“Call”)を行ない、アフリカ系アメリカ人の苦しみを和らげていた。彼女は、語った言葉に魂が宿る世界を司っていた。彼女の言葉は、聴く者の身体を刺激し踊りださせるような、感覚に訴えるものであった。また、スタンプ・ペイドは、ポール・Dが124番地の家を去った後に様子を見に行き、騒々しい音を聞く：“124 was loud. Stamp Paid could hear it even from the road” (169)。これらの音を、彼は黒人や怒っている死者のつぶやきと理解する：“[Stamp Paid] believed the undecipherable language clamoring around the house was the mumbling of the black and angry dead” (198)。しかし、つぶやきに交じって、彼には聞きとれはしたが理解できない声があった。それは124番

地の女たちの“unspeakable thoughts, unspoken” (199) であった。⁴⁷⁾ アフリカ系アメリカ人の世界では、言葉は、特定の意味の記録や伝達のためだけに存在するのではない。ノーベル文学賞受賞演説において、子供たちが老婦人に “Don’t you remember being young, when language was magic without meaning?”⁴⁸⁾ と尋ねたように、モリソンは「意味をもたない言葉」の空間が存在することを確信している。アフリカ系アメリカ人の言語空間においては、口にだせなかったり、言葉にならない想いは、意味を限定する言葉の機能を越えたところで生命と力をもって存在しているのである。

アフリカ系アメリカ人は異なる言語をもつ複数の部族の出身であったが、文化の根底においては多くの点を共有していたという。⁴⁹⁾ その一つに口承文化の伝統がある。奴隷制下において、書き言葉を重視しない口承文化の伝統は、支配者の言葉がふるう暴力に意識を向けることになかったセスのような奴隷から、奴隷制の矛盾を考える力を奪うこととなった。読み書きの習得が禁じられていなかったスウィート・ホームの奴隷の中でそれを習いたいと思ったのはセスの夫のハーレだけであった。ハーレを除いた奴隷たちにとって、大切なことは紙に書かれはしないと思われていたからである：“[N]othing important to them could be put down on paper” (125). ダグラスが気づいたように、奴隷制は彼から文字だけでなく、考える力を巧妙に奪っていた。書き言葉より話し言葉を重視したアフリカ系アメリカ人の文化は、皮肉なことに、奴隷制における支配者の権力を強化することになってしまったのである。

スウィート・ホームの黒人たちの、英語と母国語の話し言葉が行き交う文字のない世界と対照的に、新しくやって来た「先生」はノートを持ち歩き、ガーナー夫人の調合法でセスが混合したインクを使い、常に彼女たちを記録している：“It was a book about us but we didn’t know that right away.... He commenced to carry round a notebook and write down what we said” (37). 「先生」の連れてきた甥の一人がセスを抑え、もう一人が彼女の「ミルクを盗んでいる」あいだ、「先生」はその様子をノートに書き留めていた (70)。セスは性的な暴力と同時に、「先生」の書き言葉による二重の暴力を被るのである。ノートに記述されたセスは一方向的に「定義」され、セスの人間性は、「先生」の言葉の世界の中で暴力的に断片化されてしまうのである。

毎日午後には、「先生」は生徒である甥たちに読み書きを教えていた。ある日セスは、その授

47) French feminismの影響を受けて*Beloved*を解釈するFerguson, Jennifer Fitzgerald (“Selfhood and Community: Psychoanalysis and Discourse in *Beloved*,” *Toni Morrison*, ed. Linden Peach. NY: Macmillan, 1998), Barbara Rigney (*The Voices of Toni Morrison*. Columbus: Ohio State UP, 1991)らは、“unspeakable thoughts, unspoken”を精神分析学の観点から解釈し、前エディプス期、あるいは、「セミオティック」な段階に属するものと解釈する。男性の使用する言語体系に属する前の、つまり、男性のヘゲモニーをおびる前の、言葉の原始の状態にあると解釈するのである。女性のテキストにおいて、言葉になる以前の沈黙は、男性の権力から解放されていることを意味する。また、沈黙と同様に、女性たちによる「音」も同様の意味をもつ。*Beloved*において、共同体の女性が124番地の家の悪魔祓いをする場面で、はじめは祈りを唱えるが、やがて言葉にならない「音」を叫びだす。いかなるイデオロギーからも解放された、言葉ではない「音」をだす：“In the beginning there were no words. In the beginning was the sound, and they all knew what that sound sounded like” (*Beloved*, 259). 女性による「音」は、言葉になる以前のセミオティックな状態に属する特別な言葉として描写される。

48) *The Nobel Lecture in Literature*, 1993, 25.

49) 「新世界に到来したアフリカ人=黒人は身体的特徴および生活様式において大きく異なっていたが、多くの共通した文化的要素を有していたのである。」(クォールズ, 16).

業で「先生」が彼らに教えていることを偶然聞いてしまう。彼女は自分の名前が聞こえたので注意して聞くのであるが、「先生」が使った英単語（“characteristics”）の意味がわからず、あとでガーナー夫人に聞くことで「先生」の意図したことを理解する。その午後セスが耳にしたことはあまりにも衝撃が強く、今まで誰にも話したことがないのだとピラヴィドに語る。「先生」は「生徒」たちの書いたものを見て、つぎのように言う：“No, no. That’s not the way. I told you to put her human characteristics on the left; her animal ones on the right. And don’t forget to line them up” (193). 「生徒」によって記された動物の特徴を記す文字は、セスの尊厳を傷つける。「特徴」という英単語や、特徴を記した文字を、セスは理解できない。セスにとって「先生」たち白人が記す書き言葉は、人間の尊厳を踏みにじる抑圧／支配の道具にすぎない。白人の書き言葉にたいするセスの恐怖は、ひとまず先に子供たちを逃亡させたときに、“No notebook for my babies and no measuring string neither” (198) と感じたことにも表れている。白人の一方的な書き言葉で記されることから子供たちが解放されたことが、彼女の喜びだったのである。

シックスウは空腹に耐えかねて子豚を殺し、食べているところを「先生」に見つかってしまう。彼は、それは「盗み」ではないと言い張る：“Sixo plant rye to give the high piece a better chance. Sixo take and feed the soil, give you more crop. Sixo take and feed Sixo give you more work.” 結局、シックスウは子豚を「盗んだ」ことに加え、「定義される者」が言葉の意味を「定義」したことから、鞭で打たれて罰せられる：“[Schoolteacher] beat him anyway to show him that definitions belonged to the definers—not the defined” (190). 「先生」のノートに記録されるように、奴隷は、言葉をもつ支配者によって「定義される。」支配者の言葉は、一方的に彼らを動物の特徴をもつ者と定義し、彼らを動物のように扱う暴力となる。Fergusonは言葉の暴力をつぎのように指摘する。

Within the context of slavery, language and all its written definitions may well appear no more than the instrument of the oppressor—Schoolteacher with his books and his coachbox full of paper arriving to break Garner’s slaves, measure Sethé’s head and inscribe her...as ‘animal’.⁵⁰⁾

「先生」がノートに書く文字は、記録の対象となっているセスたちが読むことのできない一方的なものである。奴隷は、言葉をもつ支配者が書いたことを知ることも、間違いを正すこともできない。英語を習得しなければ、自分自身について書かれたことを理解することはないのだ。支配者たちが自分たちについて間違っただけを言っていると主張するには、それが理解できなければならない。書かれた者がそれを正さない限り、「先生」が「生徒」たちを教育したように、奴隷にたいする偏見は次世代へと引き継がれてしまう。一方の者だけが言葉を持ち、その習得を禁じられた他者を支配することは、口にハミ(“bit”)をはめて声を奪う、物理的な暴力行為に等しい。そして、言葉の支配／被支配関係は、物理的／社会的関係を強化し、再生産していくことになる。

(4)

英語の文字を読んだり書いたりする白人たちの世界とは異なり、アフリカ系アメリカ人の世

50) Ferguson, 122.

界では、語られた「言葉」が文字にされる必要がなくとも機能する独自の世界があった。また、旧世界から継承してきた口承文化の伝統もあった。アフリカ系アメリカ人の言語観と英語のそれが織りなす性質の異なる両者の言語空間は、優劣をつけられるものではない。しかし、異文化に属する民族を奴隷制のもとに強制移住させたアメリカのような場合は、既存の言語空間に、突然異種の言語体系が合わせられることとなった。自然発生的に存在するようになったのではない異なる言語体系は、ヘゲモニーを生じさせることとなる。それをうち崩すには、支配言語に抑圧され続ける母語の言語体系を維持していくのではなく、支配言語を習得することでそれと戦うことが強力な武器となる。

セスは自分が犯した子殺しについて、新聞の記事に書かれていることを全部理解することはできない。事件の真相が書き言葉に表わされうることなどないというセスの考えは、記事に使用されている英語という言語との距離感によって生じている：“Sethe could recognize only seventy-five printed words (half of which appeared in the newspaper clipping), but she knew that the words she did not understand hadn't any more power than she had to explain” (161)。もし、記事が理解できる言葉で書かれていたなら、セスはその内容を知ることができたであろう。しかし、たとえ自分のことであっても理解できない言葉で書かれると、自分のこととは思えない。この記事をポール・Dも読むことができず、映りの悪いセスの写真に面影を何とか見いだそうとする以外、事件が本当にセスに関するものであるのかも自分では確かめられない。一方的に書かれ、その内容の真偽にたいしても異議を唱えることはできない。英語で記され、支配されるままである。

英語を習得したダグラスは、奴隷制廃止論を新聞から学んだ。そして、北部へ逃亡後は、講演と*The North Star*誌のような新聞を発行することを奴隷制廃止運動の基盤とした。このように、英語が奴隷制の実体を訴える武器として機能していたことは、1873年から74年を舞台とした*Beloved*にも記される。英語を書ける者が現実を記し、それを読める者はさらなる知識を手に入れることができた。奴隷制を廃止するためにも英語は必要であったが、少なくとも形式的には奴隷制が廃止された南北戦争後も、その必要性は同じであった。白人は町から黒人を一掃したり、黒人であれば、子供も女も鞭打たれ、頻繁にリンチが行なわれていた。暴力には暴力をもってそれを押さえるのではなく、「英語」で応酬したことが、スタンプ・ペイドによって語られる。

He smelled skin, skin and hot blood. The skin was one thing, but human blood cooked in a lynch fire was a whole other thing. The stench stank. Stank up off the pages of the *North Star*, out of the mouths of witnesses, etched in crooked handwriting in letters delivered by hand. Detailed in documents and petitions full of *whereas* and presented to any legal body who'd read it, it stank. (180)

*Beloved*においては、英語による暴力を受けるアフリカ系アメリカ人の姿が描かれているのと同時に、それにたいして戦う術を身に付けようとした2人の登場人物がいる。南北戦争前はセスの夫ハーレが、戦後にはデンヴァーが、各々、英語を武器とすることで戦おうとする。「呼びかけ」をしていたベビー・サグスも、本物の説教師のように英語が読めれば聖書が読めると思い、また、デンヴァーが英語を学ぶことをうれしく思っていたが、実践には至らなかった。奴隷制下のスウィート・ホームの奴隷たちは、ガーナー氏に読み書きを許されるといって極めて異例の待遇を受けていた。しかし「アルファベットを愛した」ハーレだけが、読み書

きと計算を習得する: “If you can’t count they can cheat you. If you can’t read they can beat you. They thought that was funny. Grandma [Baby Suggs] said she didn’t know, but it was because my daddy could count on paper and figure that he bought her away from there” (208). 彼は考える力を奪われることなく、英語が奴隷制を維持するイデオロギーとして機能していることに気づき、それに取り込まれないために英語を学ぶ。その結果、彼は母親の自由を買い取ることができたのであった。しかし、母には自由を買い取ることができたが、自分、セス、子供たちの自由はどのように買い取れば良いのだろうと、ハーレはセスに話す (196)。知識、言葉、計算の能力を武器としても、奴隷の戦える範囲はきわめて限定されたものであることが奴隷制の現実であった。

南北戦争後、混血であるレディ・ジョーンズは、「違法ではないが必要はない (102)」と白人に考えられていた黒人を教育するための私塾を開いていた。デンヴァーがそこに一年間通い、英語を学ぶときに感じた大きな喜びは以下のように描写される: “The effort to handle chalk expertly and avoid the scream it would make; the capital *w*, the little *i*, the beauty of the letters in her name, the deeply mournful sentences from the Bible Lady Jones used as a textbook” (102). しかし、級友のNelson Lordに母が隠してきた子殺しの事件を教えられ、その後の2年間全く耳が聞こえなくなると、ピラヴィドが現れるまでは外の世界から遮断されて過ごす。しかし、ピラヴィドとの関係で母が精神的に疲れはてて仕事ができなくなり、食べる物にも困るようになると、デンヴァーは124番地から出て、ほかの黒人たちに助けを求める決意をする。セスの子殺しのために、出所後も共同体から疎外されてきた124番地の住人たちにとって、共同体とのつながりを持つ目的で用いられる言葉は、閉塞された世界からの救済をもたらすものである。共同体とのつながりを修復していく過程でデンヴァーは英語の学習を再開し、レディ・ジョーンズの家に通いに一度通うようになる: “[Lady Jones] gave [Denver] a book of Bible verse and listened while she mumbled words or fairly shouted them. By June Denver had read and memorized all fifty-two pages—one for each week of the year” (250). 4月から始めて6月までの数ヶ月のうちには、1年間かけて学ぶテキストを暗記してしまうほど、デンヴァーは言葉を渴望している。

「デンヴァーの外での生活が改善された (250)」のは、言葉との接触を再開し、英語を学習したことによる。かつて、デンヴァーを沈黙の世界に追いやったネルソン・ロードと偶然再会したとき、彼は彼女に “Take care of yourself, Denver” (252) と言う。まるでこの言葉のために言語が作られたかのように、デンヴァーはこれを聞く: “[S]he heard it as though it were what language was made for” (252). 英語を学んでいたために、この言葉を理解することができ、言葉は彼女の傷を癒すことになる。仕事を探すためには事情を話さなければ誰も助けてくれない (253) ことに気づき、デンヴァーは言葉を語ることによって、124番地から離れた世界との関わりをさらに深めていく。食べ物を求め、生きていくために124番地から足を踏み出したデンヴァーは、言葉をとおして外界とつながり、人とつながり、英語を学んだことによって心の傷が癒されていく: “... language can be enabling, not only as an instrument of power but because it is one of the crucial means by which we express and communicate.”⁵¹⁾ 母の子殺しを知らせる英語は、デンヴァーを音や言葉のない世界へ追い込んだ。しかし、その事実を受容していく過程で英語の学習を再開していたデンヴァーにとって、英語は癒し的手段となったのである。

51) Ferguson, 123.

ノーベル文学賞受賞演説において、おそらく子供たちが聞いたであろう老婦人の言葉が告げられる：“I am old, female, black, blind. What wisdom I have now is in knowing I can not help you. The future of language is yours.”⁵²⁾ 老婦人が次世代の子供たちに言葉の生命を託したように、*Beloved*においても、ベビー・サグス、セスと続いた歴史は、次世代のデンヴァーが、かつては支配者の言葉であった英語との関係において新しい未来を開くことを予言して幕を閉じる。*Beloved*において、モリソンはアフリカ系アメリカ人の「英語」をめぐる歴史の一面を提示した。「英語」による暴力に苦しめられ、それを武器にして戦った歴史を経て、デンヴァーの未来においては、「英語」は自分たちを傷つける手段でも、戦いの武器としてのみ存在するものではない。“Take care of yourself”という一言が彼女に心からの救い、癒しを与えたように、英語がアフリカ系アメリカ人の未来を開く「生きた言語」となる可能性を、モリソンは確信しているのである。

[5]

アフリカ系アメリカ人のトニ・モリソンが英語を用いて作品を著わすのは、自らの歴史や現実の姿を他者によって表象されるだけでなく、自分自身で明らかにしていくためである。アフリカ系アメリカ人自身にとって、また、他者にとっても、英語は彼女の主張を広く共有させるための武器である。しかし、モリソンは、英語を武器として利用しているだけではない。アフリカ系アメリカ人にたいしてふるわれてきた、さまざまな物理的暴力、言葉の暴力、差別、偏見を弾劾するだけに英語を用いるのであれば、それは、彼女自身が批判している「死んだ言葉」となってしまう。彼女が言葉の生命を殺してしまうこととなる。

モリソンの*Beloved*は、奴隷制の苦難を体験した祖先をもつアフリカ系アメリカ人による、彼らの苦難の歴史を再構築した小説である。しかし、この小説は、アフリカ系アメリカ人にたいする差別語や、話し言葉に彼ら独自の英語表現が用いられているにせよ、スタンダード・イングリッシュを用いて書かれている。西洋の文学伝統の影響を強く感じさせる作品となっており、アフリカ系アメリカ人自身の言葉と文学形式を用いているわけではない。アフリカ系アメリカ人文学に常套的に用いられる“slave narrative”のように、奴隷制の現実を暴き、白人を弾劾することをおもな目的とするのであれば、英語は弾劾だけの目的で使用される「死んだ言葉」となる。しかし、モリソンは、現実と想像の世界の混在、民話、伝説、神話のモチーフ、ポストコロニアル文学に特有のマジックリアリズムの手法、西洋文学におけるポストモダニズムの手法といったさまざまなナラティブを用いることで、弾劾と事実を伝達するだけの狭い目的に言葉を用いることを回避している。

Nancy J. Petersonは、*Beloved*を西洋文学とアフリカ文学のナラティブの技法を併せもった作品であるとするPérez-Torresの批評をつぎのように紹介している。

As Pérez-Torres observes, *Beloved* shares a pleasure in linguistic word play, pastiche, and metanarrative with quintessential postmodern novels written by Donald Barthelme, John Barth, and Thomas Pynchon. But *Beloved* refuses to indulge in “the full-blown fancy,” as Pérez-Torres puts it, associated with typical postmodern novels; rather than becoming “lost in the funhouse” of language or stories..., *Beloved* brings us back into connection with the historical real. Thus,

52) *The Nobel Lecture in Literature, 1993*, 23.

through his analysis of *Beloved*, Pérez-Torres recognizes that language has not only aesthetic value in postmodern culture, but is inextricably linked to the ideological: "The language of slavery within *Beloved* is comprised of signs written with whips, fires, and ropes. It is this discourse that is literally inscribed on Sethe's back...."⁵³⁾

モリソンが礼讃する「生きた言葉」とは、言葉によって意味が限定されることなく、言葉が定義する意味の枠を越えたところにまで読者の想像力を及ぼせるものである。英語と西洋文学の伝統を用いることで、アフリカ系アメリカ人のテキストが西洋のものに似てきてしまい、彼ら独自の文化が抑圧されるのではないかとの危惧の念をアフリカ系アメリカ人たちが抱くのはある意味で当然のことであろう。彼らは意識するか否かを問わず、アメリカのイデオロギーに取り込まれ、エスニシティの独自性を剥奪される危険を現在でも負わされているからである。モリソンの小説にみられる、アフリカ系アメリカ人の祖国の文化に特有なナラティブとポストモダニズムに特有な手法の融合への試みは、「生きた言葉」のための空間を広げるために採用した彼女自身の戦略である。そして、彼女の言葉は、アフリカとアメリカを対等な関係に再配置する、モリソンが理想とする新しい「英語」となることが意図されているのである。

モリソンが言語観を述べたノーベル文学賞受賞演説は、アフリカと西洋のナラティブの技法が混在した構成をとっている。「英語」が白人の言葉として黒人の言葉に権力をふるうときは、それは「死んだ言葉」として何も生みださない。しかし、英語がアフリカと西洋を橋渡しし、言葉の背景となる2つの文化がそれをおして融合されるとき、「生きた言葉」となって新しい言語となる。この受賞演説は、こうした彼女の言語観をナラティブの技法において実践している。

アフリカ文化を感じさせるナラティブとしては、“Once upon a time...”で始まる演説の冒頭が、アフリカ文化に特有な口承文化の伝統を思い起こさせる。また、言葉が魂をもち、生命をもった小鳥にたとえられる擬人化には、アフリカ文化の神話や伝説の影響が感じられる。ポストモダニズム的な手法としては、演説全体の基調をつくる入れ子細工の語り的手法があげられよう。実際に演説するモリソンの声を聞きながら、聴衆／読者はアフリカ系アメリカ人の老婦人と子供の対話の声と、そこに時折割り込む第三者としてのモリソンの声を聞く。3重の響きは、演説の言葉を反響させる。ポストモダニズムに特有な手法の一つであるナラティブ操作を通じ、そして演説の声の一つがアフリカ文化に度々登場する知恵にたけた語り部のものであることによって、アフリカと西洋の声が反響しあう。このように、受賞演説は、アフリカと西洋のナラティブが、響き合い、流通していく構成をとっている。「生きた言葉」は、新しい可能性を生み出すものである。

本論では、小説家トニ・モリソンをめぐるアフリカ系アメリカ人と「英語」の関係を概観し、アフリカ系アメリカ人作家が英語を用いて作品を著わすことの意味を考察してきた。モリソン

53) Peterson, 474. アフリカ系アメリカ文学にみる手法を、西洋文学に特有の手法とは異なったものとみなす人もいる。たとえば、Bernard Bellはつぎのように言う：“... unlike their white contemporaries, [African American writers] are not merely rejecting the arrogance and anachronism of Western forms and conventions, but also rediscovering and reaffirming the power and wisdom of their own folk tradition: Afro-American ways of seeing, knowing, and expressing reality” (*The Afro-American Novel and Its Tradition*. Amherst: Massachusetts UP, 1987. p. 283-4).

は、アフリカ系アメリカ人にふるわれるさまざまなヘゲモニーにたいする武器として、また、そのヘゲモニーを内包した既成の価値観へ挑戦するために、支配者の言葉なる英語を用いて執筆している。

Her double-voicedness is one manifestation of her double vision for she employs both the black vernacular and Standard English to challenge the established value system. Complicating this state of affairs is the fact that Morrison herself was, and is, the beneficiary of many of the values she attacks.⁵⁴⁾

しかし、たしかに戦いの必要を感じていたにしろ、モリソンは異民族間の差異と支配／被支配関係の存続を前提に、英語を武器とすることを望んだのではない。戦いの武器に転化するとき——それが支配者によって用いられようと被支配者によって用いられようと——言葉は生命を失い、「生きた言葉」の空間は狭められていく。モリソンは支配／被支配の関係を転倒させるのではなく、支配／被支配関係の温床となる「死んだ言葉」を「生きた言葉」に転化させることを目指しているのである。「生きた言葉」である限り、それは英語であってもかまわない。「生きた言葉」の空間には、「支配者の言葉」などは存在しないのだから。

アフリカ系アメリカ人のトニ・モリソンが英語を用いて執筆することは、他者の言葉を借りて表象することを意味するのではない。それは、バベルの塔の崩壊によって生じた世界から、「死んだ言葉」を払拭する試みである。複数の言葉が出現したこと自体が人類の不幸ではなく、言語間に支配／被支配の関係が生じたこと。その関係を生成する「死んだ言葉」が横行したこと。これらがバベルの塔の悲劇なのである。バベルの塔崩壊後の世界は、複数の言語／文化が生き生きと各々の生命や存在を主張し合う、多様性にあふれた楽園たりうる。その楽園では、「生きた言葉」の空間が広がり、複数の言語／文化が、言葉の意志によって自由に離反したり融合したりしながら、既成の枠を越えた新しい価値観を生み出す可能性をもつのであろう。楽園に身をおくモリソンが用いる言葉は、支配／被支配を転倒させるための「死んだ言葉」であってはならない。彼女にとって、英語とは、楽園で融合され、そして、新たに生まれたアフリカ系アメリカ人自身の新しい言語——「生きた言葉」なのである。

54) Denise Heinze, *The Dilemma of "Double-Consciousness"* (Athens: U of Georgia P, 1993), 7.